

カンボジア 救急用トゥクトゥク寄贈式

PHJ カンボジア事務所は、3月11日にチュックサク保健センター近くの寺院で、救急搬送用トゥクトゥク4台の寄贈式を実施しました。この活動を支援くださっている大塚製薬株式会社企画渉外部部長の梶山様を迎え、150名以上の村人も参加し、賑やかに執り行われました。村の有力者である地域の評議会議長、保健センター長、村長などが挨拶にたち、謝意表明がありました。また、僧侶による祈祷や、PHJがかつて地域に寄贈したクメール伝統楽器の演奏など、とてもカンボジアらしい寄贈式となりました。

コンポントム州で実施中の健康な村づくり事業では、村の女性たちの安心・安全な出産を支援しています。夜中に産気づいた妊婦の中で、保健センターまでの乗り物が見つからずに自宅で分娩を行わなければならない人が大勢います。自宅分娩の場合、難産になった時、母体も新生児も命の危機にさらされます。どんなに健康に自信のある女性であっても分娩にはスキルのある助産師の力が必要で、助産師による分娩を受けるためには、夜中でもまず保健センターに行かねばなりません。農村部で妊婦を運ぶ車を探す時には、値段を交渉したり、親せきからお金をかき集めたりなど、交通手段の確保は骨が折れるようです。

私たちは、村から保健センターや病院への交通手段を確保するために、救急搬送を行うための仕組み作りを支

援しています。東南アジア特有の「トゥクトゥク」というバイクに荷台がついた乗り物を改造し、救急車として使うという試みです。トゥクトゥク利用記録や会計記録などの運営管理は村で選出された代表が行います。システムをサポートするために村人が会員になり、毎月少額の会費を支払います。会員は緊急の場合にトゥクトゥクを一部無料で利用できるなどの特典があります。昨年タノツチュム保健センターとその地域の村に2台のトゥクトゥクを寄贈しました。これまでに毎月45件の搬送に使われています。

トゥクトゥクの救急車は村に寄贈しただけでは機能しません。これからカンボジア・スタッフが毎月の細かいチェックをして、村人が自分たちでシステム運営できるように支援していかねばなりません。とても手のかかることですが、直接人を救う意味のある活動だと考えています。村々を走るトゥクトゥクの今後の活躍を期待したいと思います。

東京事務所 海外事業担当 中田



寄贈式であいさつする
梶山様



僧侶による祈祷。お経を
唱えながらトゥクトゥクに
聖なる水を振りかけます。



チュックサク評議会
委員長へトゥクトゥク寄
贈契約書を渡しました。

巻頭言

PHJと医薬品産業のそれぞれが果たすべき役割



PHJ 理事
内藤晴夫

日本製薬団体連合会会長
エーザイ株式会社
代表執行役社長 (CEO)

医薬品産業の果たす役割は、イノベーションを通して優れた医薬品を創出し、日本及び世界の人々の医療と健康に貢献することであり、ここにおける期待は、高齢化の進む先進国はもとより、急速に疾病構造が変化する新興国や未だに多くの感染症が蔓延する途上国などにおいてもますます高まっています。

国際社会の動向を見ても、昨今の地球規模で広がっていく貧富と生活環境の格差を前にして、21世紀に社会全体が共有する目標として、国連や各国政府などの諸機関が掲げたミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals : MDGs) があります。MDGsは、8つの開発目標を掲げていますが、特にグローバル・ヘルスに関するものとして、幼児死亡率の削減、妊産婦の健康の改善、HIV・エイズ、マラリアその他疾病の蔓延防止、などを挙げています。開発途上国において人々の健康維持と医療レベルの向上

を根付かせるには、地域に密着した草の根の活動が必要と考えています。国や企業の支援では埋めきれないきめ細かい草の根の活動は、NGOやNPOの皆様の協力がなければ成り立ちません。PHJは設立以来、開発途上国の人々の自立に向けて、「保健・医療の教育」を通じて、地道にしかも継続して、MDGsの達成に向けた支援活動をつづけております。

一方、このグローバル・ヘルスの点においては、医薬品産業の果たす役割は増大しており、問題解決に向けた新しい枠組が求められています。例えば、Public Private Partnership (PPP) を形成して、政府をはじめとする官民の各々のグループが、持ち味や技術、ナレッジを活かし、ソーシャル・イノベーションを起こしていこうとする試みです。医薬品産業も2012年1月のロンドン宣言に参加し、欧米政府、WHO、世界銀行、ビル&メリンダ・ゲイツ財団、途上国政府とのパートナーシップを形成して、WHOの2020ロードマップの目標である、10の顧みられない熱帯病 (Neglected Tropical Diseases : NTDs) の2020年迄の制圧に向けて努力しています。

PHJと医薬品産業がそれぞれの果たすべき役割を発揮し連携することにより、開発途上国の人々への「医療と健康」の提供への貢献が可能になると思います。PHJのますますのご活躍、並びにご発展を祈念いたしております。

インドネシア—ロート・インドネシア社員からの現地報告（寄贈診療所で保健教育）

ロート製薬株式会社とロート・インドネシア社は2011年7月にPHJが活動しているバンタン州セラン県テイルタヤサ自治区のクマニサン村に助産室を備えた診療所を寄贈しました。2011年10月24日にはロート・インドネシア社の代表も参加し、開所式を行いました。以来この診療所は有効に使われて、村人たちに喜ばれていると報告をうけています。

ロート・インドネシア社の使命は「全ての人に健康な明日を」提供することです。この使命を果たす具体的行動として、支援地域の保健医療システムの強化を継続的に行いたいとの社員の強い思いで、診療所での保健教育活動プログラムを実施しました。



クマニサン村の診療所開所式の様子と入口の看板

2012年11月20日、PHJインドネシア事務所と協力して、クマニサン村で保健教育の一つとして「目の健康」教育を行いました。50名の村人がこのプログラムに参加し、目の健康を維持し、目の病気や損傷を起こさないように、毎日の生活スタイルを変えてゆく必要性を学びました。当社は今後もこのような人々の生活に根ざした保健教育を続けたいと思います。



診療所での「目の健康」教育
（講師はロート・インドネシア社員）

（ロート・インドネシア 人事・総務課 Lucia R. Meila）

PHJの活動方針は教育を通じて地域の保健医療システムを強化し、自立化を支えることです。ロート・インドネシア社から診療所の寄贈だけでなく、社員の方がその診療所で継続した教育活動を提供するという、ハードにソフトを付加した企画を共有して下さることは大変有難く大いに力づけられました。

（PHJインドネシア事務所長 伊藤）

PHJ ベトナム・タイ活動視察

横河商事株式会社は、2008年10月、創立70周年記念行事の一環として、PHJ内に〈横河商事基金〉を設立しました。2013年1月その基金のベトナム・ハノイにおける活動と、PHJタイの活動を知るために視察員の一員として訪ねてきました。

私は、PHJの活動についても自社の基金にさえも、これまで関心が高かったとはいえ『東南アジアで母子健康に関わる支援をしている』という程度のおおまかな認識しか持っていませんでした。しかし、実際に現地で〈生の姿〉に触れ、私の想像以上にスゴイことをやっているんだ！と本当にビックリしました。

〈横河商事基金〉は、PHJがタイ・チェンマイで実施している〈乳がん早期発見プロジェクト〉のノウハウを、ベトナム・ハノイに展開し、3年後には「完全現地化」を目指して活動している事業をPHJを通し支援しています。その事業パートナーがベトナム・ウィメンズ・ユニオン（VWU）です。

VWU エグゼクティブ会議では、副代表のビンさん



ベトナム・ハノイで 乳がん自己触診研修に参加した VWU メンバー

から「このプロジェクトは全会員に有益なもので、行政の理解も得ている。」との説明がありました。VWUがこのプロジェクトに本気で取り組んでいる姿から、言葉は分からずとも、その熱意が充分伝わって来ました。



PHJ タイ事務所を訪問（左から2人目筆者、3人目横河商事坂口取締役）

翌日のトレーナー育成研修は、楽しく興味をひくプログラムで構成されており、受講者は熱心に聴講されていました。このプロジェクトによって、罹患率の高い乳がんの早期発見に繋がれば、大変喜ばしいことだと思いました。

また、タイ・チェンマイでは、障がい児・慢性疾患児の家庭訪問と、乳がん・子宮頸がん早期発見プロジェクトの看護師を対象にした研修を視察しました。PHJの現地スタッフは個別の支援をきめ細かく提供しており、大変感銘を受けました。

ベトナムでも同様にこのプロジェクトが現地に根付き、〈横河商事基金〉がその下支えになれるとすれば、大変光栄なことだと思いましたし、我が社がそれにふさわしい企業でいられるようにと、気持ちを新たに1週間の視察旅行でした。

横河商事株式会社 中部支社
企画管理課 清水みゆき

「東日本大震災」支援—ドナーの現地視察

PHJは頂いた寄付金で宮城県気仙沼市医師会のご協力を得て被災したクリニック約40機関に医療機器、什器類を寄贈し医療機関の復興のお手伝いをしています。その他にも多くのドナーからご寄付いただいたパソコンやプリンター、衣類、衛生用品等を必要とする被災地へ支援してきました。

昨年後半には、数社のドナーのトップの方から被災現場を視察したいとの要望があり、PHJが支援している気仙沼、南三陸、石巻をご案内し、そこで各社夫々の支援が本当に役に立っていることを実感していただきました。視察の途中、まだ津波の爪痕が生々しく残っている南三陸では皆さん車から降りてカメラのシャッターを押しながら更なる復興への思いを深くされておられました。

このように場所によっては復興が遅れておりまだまだ支援を必要としております。PHJはこれからも被災地のニーズに合った活動を続けてまいりますのでご支援をよろしくお願いします。

東京事務所 横尾



気仙沼で大きな被害を受けた森田医院を視察するアシスト社ビル会長他役員の皆様



ダンヒル・カルロ社長に気仙沼市医師会長から感謝状授与

2011年3月15日から2012年12月31日までの東日本大震災寄付金の収支

単位:万円

収入	現金寄付	10,405
	商品寄付(医療機器・事務機等)	20,429
支出	医師派遣費・医療機器調達	6,890
	商品支援(医療機器・事務機等)	20,429
	輸送費・スタッフ活動費	1,700
残額	復興支援に使う予定	1,815

五月女理事



Vol.9 国旗は語る／憧れの国日本の日の丸

日本は世界の中でどのような位置を占めているのか、どのように見られているのか、その日本について我々日本人が正しく認識することは世界を見る上で極めて大事なことです。ほぼ2年前に起こった東日本大震災後に、日本は世界の災害支援の歴史の上で、最大の公的支援と民間からの義捐金をいただきました(阪神淡路大震災の際も同様でした)。日本に好意を抱いてくれる国家・国民が多数存在する証でもあります。最近の複数の権威ある調査結果で、日本は世界の中で最も安心で平和な国として“トップ5”以内に入っています。また世界の大都市で最も安全、清潔、便利、親切な都市では東京が第1位でした。(但し、最も生活費の高い都市として、東京(1位)、大阪(2位)がランクはされています。)

第2次大戦後の灰塵からの奇跡的な復興を遂げた日本は、独立したばかりのアジア・アフリカの途上国にとって憧れの的でした。日本のような国になりたいと願った国は沢山あり、国旗も日本国旗のようにしたい国も多々ありました。実は国旗は勝手に作れる、勝手に変更できる(実際に例がある)、どこかの国際機関や役所に届ける事もないので、日本と同じデザインにすることも可能なのです。

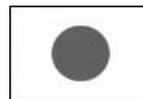
おそらく日本の国旗「日の丸」は世界最古の国旗でしょう。紀元645年大化の改新ごろから慣習的

に日の丸が使われていました。1859年に徳川幕府「お触れ書き」により「日の丸」を日本の国旗と定めました。最終的に1999年制定の法律により正式国旗となりました。

欧州では青・赤・白等の三色旗、アフリカでも汎アフリカ色(赤・黄・緑)の三色旗が多々あり、紛らわしい。しかし日の丸は最も輝かしい間違いようもない国旗です。

“昇る太陽”のように再び日本が輝きを取り戻し、途上国はもとより世界各国から更に敬愛され信頼される国家になってほしいものです。

(注) 欧州の代表的三色旗のフランス国旗、アフリカの代表的三色旗のエチオピア国旗が歴史的国旗として、後に多くの国々の国旗制定の基盤となっています。



日の丸
(白地に赤)



フランス国旗
(左から青、白、赤)



エチオピア国旗
(上から緑、黄、赤、真中はブルーに黄色の星)



五月女光弘(さおとめみつひろ)
外務省初代NGO大使、元特命全権大使、元早稲田大・聖心女子大等兼任講師、文芸春秋ベストエッセイストの一人、著書多数、PHJ理事等。

会員のひろば

会員の広場 「大学院の授業を通して」

鶴ヶ谷典俊 (個人賛助会員)

私は、慶應義塾大学大学院経営管理研究科で企業経営に求められる様々な専門知識を学んでいます。

PHJを知るきっかけとなったのは、経済・社会・企業という授業の一環で、授業では取り扱わない企業を取り巻く問題を取り上げ、問題提起や解決案の提示等を行うというグループワークでした。私の所属するグループは、授業の担当教授でもありPHJの副理事長でもある田中先生の紹介でPHJを研究する機会を得ました。PHJはもちろんNPO法人についての知識もまったくなかったため、スタッフの方に会う前に、ホームページのコンテンツや過去のホープニュースを丹念に読んでPHJについて学びました。

企業が営利の追求を通じて、社会に対して価値を提供していることに疑いはありません。しかし、企業にはできない価値を提供するPHJの在り方に感銘を受け、少しでも役に立てればと思い個人賛助会員になりました。

その後、グループメンバーで手分けをしながらグローバルフェスタのPHJのブースを訪問し、スタッフの方への2回のインタビューを通して研究を進めました。それらの結果を踏まえ、グループとしてPHJに対する

提言を検討しました。授業でのグループ発表では、PHJのようなNPO法人はどのような価値を生み出しているのかについても言及し、ビジネスを学ぶ同級生たちにNPOという新しい視点を提供することができました。

研究を進めるにあたり、代表の木村さん、広報の矢崎さんには大変お世話になりました。昨年9月の訪問を皮切りに、11月には関係者の方々にPHJの活性化や会員増加のための提案を行う機会もいただきました。授業では他にも数多くの課題がありましたが、一番印象深いものとなりました。

PHJは、東南アジアの母子保健の改善を目指し、互助(インフォーマルな相互扶助)の担い手となっています。日本でもNPO法人の役割はどんどん大きくなっていくことでしょう。これからは個人賛助会員としてPHJの活動を応援していきます。



PHJ事務所を訪ねた大学院のメンバーと木村代表(右から2人目が筆者)

2013春PHJスタディツアーの報告

PHJでは「カンボジアの農村にすむ人々の健康と医療について考える旅」として3月3日～9日スタディツアーを実施しました。大学生3名と大学の保健医療学部の講師の1名が参加しました。2年前までカンボジアに駐在したスタッフが同行し、カンボジアの歴史、観光、PHJの活動サイトで現地の人々と触れ合い、インタビューなど充実したツアーでした。



インタビューをした村の妊婦さんたちと記念撮影



村のお母さんたちの前で手洗いの保健教育を行うスタディツアー参加者

フォーレストパートナーシップセミナーで講演

2月21日 財団法人 地球・人間環境フォーラム主催のフォーレストパートナーシップセミナー 第2回「企業とNGO/NPOの新たなパートナーシップ：キャパシティービルディング」でPHJ代表木村が講演しました。「企業のノウハウ活用でNGOの組織運営」というタイトルで、PHJの効率的な資金運用、支援する側のニーズに合った提案、活動の進捗管理、支援者への定期報告などの事例を紹介しました。出席者からは個人賛助会員とともに法人会員の強力な支援を得られている背景を理解できたとのコメントを頂きました。



メッセージ de メッセに参加



2月24日 武蔵野市市民協同推進ネットワーク主催の展示会が武蔵野プレースのギャラリーで開催されました。昨年に続きPHJも参加して、タイ、インドネシア、カンボジアでの母子保健改善活動、感染症予防教育、障がい児支援、東日本大震災復興支援、武蔵野市の補助を一部受けて作成した「アジアのおはなしカレンダー」などを紹介しました。親子でPHJの展示を見に来て下さる家族もあり、良い交流ができました。

「アジアのおはなしカレンダー」2013 募金の報告

昨年7月26日に募金を開始し、皆様の暖かいご支援と協力により1月末までに、年末募金と合わせて合計346万円が集まりました。日本、タイ、インドネシア、カンボジアの子供達がそれぞれの国のおとぎ話を絵にした、「アジアのおはなしカレンダー」は3年目になり、子供たちの絵がかわいい、子供の字を活かした表紙がきれいだと好評を頂きました。

東日本大震災で被災した気仙沼市の公的施設や小・中学校に昨年に続き400部を寄贈して喜ばれました。募金活動にも企業の社員やスポーツ愛好会メンバーのご協力を頂き、感謝しております。

頂いた募金はインドネシア、カンボジア、タイでの母子保健、感染症予防教育などの活動や、東日本大震災復興支援に使わせていただきます。ご協力ありがとうございました。



横河電機構内でのたち募金